

25-A-18 充実したがんサバイバーシップに向けた多角的支援モデルの開発に関する研究
高橋 都 国立がん研究センターがん対策情報センター がんサバイバーシップ支援部

研究の分類・属性

情報発信・均てん化

研究の概要

地域がん登録に基づいた日本人がん患者の5年生存率は全がん平均64%に達しており¹⁾、「長くつきあう慢性病」に変化している。がん診断を受けて生存する人は2015年に533万人に昇ると試算され²⁾、その多くは活発な社会生活を営んでいる。しかし、がんを「死に直結する病」と見る社会的イメージは根強く³⁾、がん体験者は日常生活や人間関係においてさまざまな困難に直面している^{4,5)}。

本研究プロジェクトでは、H25年度にスタートし、3年目である。がん診断を受けた本人と家族の暮らし全般(以下サバイバーシップ)に関連するテーマのうち、特にわが国で先行研究が少なく支援モデルが確立されていない複数のテーマについて、オムニバス方式で取り組む。

いずれのテーマも、国内の先行研究がきわめて少ない領域であるため、わが国における実態把握および関連要因の検討と、当事者の情報・支援ニーズを明らかにすることを目指す。本プロジェクトの一連の研究から得られる知見は、わが国のがん体験者のサバイバーシップに関して、ハイリスクグループの同定や、情報・支援ニーズに基づいた支援ツールの開発、さらに、実情に基づく政策提言への活用が期待される。

具体的には、①がん体験者のライフスタイル改善・健康増進、②がん体験者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携、③がんになった親と子どものコミュニケーションと生活支援、④小児・AYA世代がん経験者の性・生殖に関連する困難と情報ニーズ、⑤がん患者のアピアランス変化と情報ニーズ、⑥初回治療がん患者への情報提供実態と満足度 の6テーマに取り組む。

上記6テーマのうち、1~4はH25年度から継続実施した。5はH26年度から、6はH27年度から追加で着手した。

参考文献

- 1) The Hospital-based Cancer Registries in Japan: Cancer Survival from the Designated Cancer Care Hospitals in 2007. National Cancer Center, Center for Cancer Control and Information Services, 2015 September.
- 2) 山口建:「がん生存者の社会適応に関する研究」厚生労働省がん研究助成金による研究報告集, 2002
- 3) Takahashi M, Kai I, Muto T: Discrepancies Between Public Perceptions and Epidemiological Facts Regarding Cancer Prognosis and Incidence in Japan: An Internet Survey Japanese Journal of Clinical Oncology 2012; doi: 10.1093/jjco/hys125
- 4) 厚労科研高橋班「治療と就労の両立に関するアンケート調査」報告書, 2012
http://www.cancer-work.jp/wp-content/uploads/2012/08/investigation_report2012.pdf
- 5) 高橋 都: 血液悪性腫瘍寛解状態—がんサバイバーシップの視点から. JIM: Journal of Integrated Medicine 23:238-240, 2013

研究経費

年 度	研究経費
平成 25 年度	6,998 千円
平成 26 年度	9,503 千円
平成 27 年度	8,180 千円
総 計	24,676 千円

研究班の組織

研究者名	所属研究機関名・職名	分担する研究課題名・項目
高橋 都	国立がん研究センターがん対策情報センター・がんサバイバーシップ支援研究部・部長	全体統括 および 各種調査票実施とデータ分析
勝俣範之	日本医科大学武蔵小杉病院・腫瘍内科学・教授	初回治療がん患者の情報 提供実態と満足度調査の実施・分析
小林真理子	放送大学・臨床心理学・准教授	「がんになった親と子どものコミュニケーション」の 調査の実施と分析
山内英子	聖路加国際病院・乳腺外科・部長	乳がん患者健康増進介入プログラムの実施と分析
桑原節子	淑徳大学・看護栄養学部・教授	婦人科がん患者健康行動調査の立案
野澤桂子	国立がん研究センター・アピアランス支援センター・センター長	男性がん患者外見変化調査の分析
加藤友康	国立がん研究センター・婦人腫瘍科・診療科長	婦人科がん患者健康行動調査の実施

研究の目的と到達目標及び実績要点

全期間

(目的と到達目標)

本研究プロジェクトの目的は、がんサバイバーシップに関連するテーマのうち特にわが国で先行研究が少なく支援モデルが確立されていない複数のテーマに着目し、詳細な実態把握と情報支援ニーズに基づく効果的な支援のあり方を提言することである。具体的には、①がん体験者のライフスタイル改善・健康増進、②がん体験者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携、③がんになった親と子どものコミュニケーションと生活支援、④小児・AYA 世代がん経験者の性・生殖に関連する困難と情報ニーズ、⑤がん患者のアピアランス変化と情報ニーズ、⑥初回治療後のがんサバイバーへの情報提供実態と患者満足度に関する研究、の6テーマに取り組む。

(第3年次評価時点の実績要点)

1. がん患者のライフスタイル改善・健康増進に関する研究：

不適切な生活習慣は、再発や二次がん、心血管障害などの原因となりえるが、本人のセルフマネジメントによって改善が期待される領域でもある。

① 婦人科がん患者（治療終了者）の健康行動調査（横断的観察研究）：

婦人科がん患者（治療終了者）のライフスタイルや健康行動の変化の実態と関連要因を明らかにする目的で、4医療機関においてH26-27年度中に計約500名の配布を目標とする無記名自記式質問紙調査を実施。H27年11月現在291の有効回答を得て結果分析中。

② 術後内分泌療法中の乳がん患者の肥満に対する活性化プログラム（運動・栄養・コーチンググループコーチング併用）のパイロット研究：

単アームの介入研究であり、ベースラインに加えてプログラム参加後1, 3, 6か月後の体重、BMI、上腕周囲径、皮下脂肪厚、血液データ（AST、ALT、中性脂肪 [TG]、総コレステロール [CHO]）、抑うつ尺度（K6）、癌患者の倦怠感尺度（CFS）、自己効力感尺度（SES）を測定。32名が登録しデータ収集を終了。結果分析中。

2. がん患者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携に関する研究：

平成25年度からの厚労省の政策として、就労専門家（社会保険労務士、産業カウンセラー、ハローワークスタッフなど）の医療機関への派遣が開始された。しかし、従来医療機関内で勤務経験のない専門職と医療職が連携する際は、互いの専門技量への理解と役割分担が必須である。すでに院外専門家を導入した7医療機関と1行政機関のヒアリングを実施するとともに、専門家によるワーキンググループを組織し、効果的な連携のあり方を提言する院内相談員向けに「社会保険労務士等との連携のヒント」を作成した。本冊子は国立がん研究センターがん情報サービスでネット公開するとともに、全国の都道府県拠点病院と都道府県がん対策担当課に配布した。

3. がんになった親と子どものコミュニケーションおよび生活支援に関する研究：

がんになった親と子どものコミュニケーションに関する先行文献のレビューでは、特に母ががんに罹患した際の父子関係の研究が少なかった。妻（=母）ががんに罹患したときの、夫（=父）と子どものコミュニケーション（母の病名や病状を子どもへの説明を含む）や、育児・家事などの生活支援へのニーズを明らかにする目的で、夫対象インタビュー調査を実施（7名）。専業主婦の夫は特に家事負担を認識。妻の発病を受け入れられない夫は子どもにも病名を伝えられない傾向にあった。インタビューの知見に基づき、配偶者や周囲からの家事育児支援、および親のがん診断の子どもへの開示行動に関する調査票を作成し、夫婦100組を対象とする無記名自記式質問紙調査計画を2医療機関のIRBに提出、審査中である。

4. 小児・AYA世代のがん経験者が体験する性・生殖関連の困難と情報ニーズに関する研究

小児・AYA期発症がん経験者の性と生殖に関する文献レビューでは、内分泌障害や妊孕性に関する研究に比べて、伴侶を得ることや性行為自体に関する研究がきわめて少なく、情報/支援ニーズが明らかではなかった。この世代のがん経験者の協力を得て、性・生殖に関するヒアリングを10名に実施。その知見にもとづき、性体験の実態、性知

識、性の悩み相談行動と相談相手、恋人への病気のカムフラアウト、性・生殖に関する情報支援ニーズに関するインターネット調査を実施し112名から有効回答を得た。結果分析中。

5. 男性がん患者のピアランス変化に関する研究：

わが国の男性がん患者の外見の変化が本人の社会生活に及ぼす影響、関連要因、対応に向けた情報/支援ニーズを明らかにする目的でNCC中央病院再来男性患者を対象とした無記名自記式質問紙調査を実施し、823名（有効回答数86.7%）から有効回答を得た。結果分析中。

6. 初回治療後のがんサバイバーへの情報提供実態と患者満足度に関する研究：

日本型サバイバーシップケアプラン（退院後の経過観察・日常生活指示文書）のあり方を検討する目的で、わが国のがん患者が種々の医療関連情報を担当医からどの程度文書で得ているか、また説明が「口頭のみ」と「口頭＋文書」の場合で満足度がどのように異なるか、患者対象のインターネット調査を実施し545名から有効回答を得た。20個の医療関連情報のうち18個について、説明が「口頭＋文書」群のほうが、有意に満足度が高かった。

（研究終了時点の実績要点）

到達目標は、がんサバイバーシップに関連するテーマのうち特にわが国で先行研究が少なく支援モデルが確立されていない複数のテーマについて、実態把握と情報支援ニーズに基づく効果的な支援のあり方を提言することであった。最終的に、6種のテーマについて、情報支援ニーズ把握も含実態把握調査を実施するとともに、一部については情報冊子を作成して公開・配布した。実態調査については、5テーマでデータ収集を終了し、結果分析を継続するとともに、ニーズに基づいた支援のあり方の提言を取りまとめ中である。1テーマはデータ収集を継続中である。

1. がん患者のライフスタイル改善・健康増進に関する研究：

① 婦人科がん患者（治療終了者）の健康行動調査（横断的観察研究）：

4医療機関において最終的に計約454名に調査票を配布し、385の有効回答を得た。現在結果分析中。

② 術後内分泌療法中の乳がん患者の肥満に対する活性化プログラム（運動・栄養・コーチンググループコーチング併用）のパイロット研究：

32名が登録しデータ収集を終了。介入1か月後時点では、体重、BMI、TG、T-Chol、抑うつ度、倦怠感に有意な改善を認めた。現在、介入3か月、6か月後の効果を分析中。

2. がん患者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携に関する研究：

院内相談員向け「社会保険労務士等との連携のヒント」を作成し、国立がん研究センターがん情報サービスでネット公開するとともに、全国の都道府県拠点病院と都道府県がん対策担当課に配布した。

3. がんになった親と子どものコミュニケーションおよび生活支援に関する研究：

夫（＝父）7名のインタビュー調査に基づき、配偶者や周囲からの家事育児支援、および親のがん診断の子どもへの開示行動に関する調査票を作成した。都内2医療機関に入院/通院する女性がん患者と夫100組を対象とした無記名自記式質問紙調査を継続実施中である。

4. 小児・AYA世代のがん経験者が体験する性・生殖関連の困難と情報ニーズに関する研究

最終的な有効回答数は108。未婚者に限定すると性体験率は健康者よりやや低く、全対象者の94%が恋人に病気を開示していた。現状で対象者はインターネットやマンガなど不正確な情報源も利用していたが、生殖への影響や子ども持つことへの選択肢などについて、より信憑性の高い情報源からの情報が求められていた。

5. 男性がん患者のピアランス変化に関する研究：

最終的な有効回答数は823（有効回答数86.7%）。85%が治療による外見変化を経験し、「皮膚湿疹」「足のむくみ」「手の爪の割れ・はがれ」「脱毛」などの苦痛度が高かった。関連情報の入手源は医師が最多（30%）であり、医師から

の正確な情報提供や他職種への紹介の重要性が示唆された。

6. 初回治療後のがんサバイバーへの情報提供実態と患者満足度に関する研究：

最終的有効回答数は545。20個の医療関連情報のうち18個について、説明が「口頭+文書」群のほうが、有意に満足度が高かった。

研究方法

1. がん体験者のライフスタイル改善・健康増進の研究

- i. 国内の婦人科がん患者（治療終了者）の健康行動調査（横断的観察研究）：4医療機関の婦人科外来において、治療終了後の患者に質問紙を配布し郵送回収。配布数は500を予定する。質問紙には、個人属性、臨床的背景、健康行動（身体活動・食事・ストレスや休養・飲酒と喫煙）の変化と関連要因、さらに、QOL・抑うつ・倦怠感を含む。健康行動の変化と促進・阻害要因の分析を行うとともに、健康行動とQOLや抑うつなど健康状態との関連も分析する。
- ii. 乳がん術後内分泌療法中の肥満に対する運動療法・栄養療法・グループコーチング併用活性化プログラムの効果に関する研究（前向き介入研究）：1回90分のセッションを週1度、連続3回実施する単アームのパイロット研究を実施。プログラム実行可能性の評価と共に、参加者の体重・筋肉量・血液データ・QOLを1、3、6か月後に評価する。30-40名の登録を目標とする。

2. がん体験者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携に関する研究：（2年次で完結）

「がん専門相談員のための社会保険労務との連携のヒント集」の作成と公開

社会保険労務士2名、産業カウンセラー1名、医師2名からなるワーキンググループ(WG)を組織。H25年度に実施した社労士と相談員ヒアリングの知見や過去の講演会などで相談員から指摘されていた疑問事項などを活かして、7個のQ&A（Q1 資格概要、Q2 連携のメリット、Q3 導入の必要性、Q4 社労士の探し方、Q5 契約時の留意点、Q6 個人情報管理、Q7 社労士の業務範囲）をたて、WGメンバーが第1稿を執筆。第1稿をWGメンバー同士で査読し、第2稿を作成。それを、H25年度のヒアリング対象者に提示し、加筆修正すべき内容や表現に関する意見を求めて第3稿を作成。さらに、WGに参加していない研究班関係者に第3稿を提示し、日本語としての読みやすさなどについて意見を求め、最終稿とした。

3. がんになった親と子どものコミュニケーションおよび生活支援に関する研究：

① 半構造化インタビュー調査：

がんの親を持つ子どものサポートグループに参加中又は過去に参加経験のある家族のうち、母親ががんで治療中、あるいは治療終了した家庭の父親対象者25名に対し、研究の主旨を記載した協力依頼を送付。協力同意の連絡があり、日時と場所の調整のついた父親7名にインタビュー実施。

内容は1) 妻ががんの診断をうけた時のこと、2) 妻ががんの療養中の家事や育児に関すること、3) 子どもとのコミュニケーションに関すること、4) 夫婦以外からのサポート享受とサポートニーズに関すること、5) 子育てに関する学校や病院、地域との連携に関すること、等である。インタビューは許可を得て録音し、逐語録を作成して質的内容分析を実施。

② 無記名自記式質問紙調査：

インタビューの知見をもとにして、都内2病院の協力を得て父・母100組を対象とした無記名自記式質問紙調査を研究倫理審査委員会に申請中。

質問項目として、1) 家事についての困難さとサポートの有無、2) 育児についての困難さとサポートの有無、3) 妻の（自分の）がんの診断をどう受け止めたか、4) 妻の（自分の）病気以前の親子コミュニケーションと診断後の親子コミュニケーションについて、5) あれば良かった支援、療養生活の支えになったものについて、6) (妻のみに質問) 1)～5) について父親の支援がどの程度助けになったか、を含む。父親と母親の調査結果を比較しながら、適宜統計的分析を行う。

4. 小児・AYA世代がん経験者が体験する性・生殖関連の困難と情報ニーズに関する研究

小児期・思春期・若年成人期発症のがん経験者支援団体の協力を得て、性・生殖に関するヒアリング

を実施。

ヒアリングの知見にもとづき、無記名自記式インターネット調査を実施。調査対象は、発症年齢0-35歳のがん経験者とし、調査URLは、同世代を対象とする複数のがん経験者支援団体で広報する。

質問項目として、個人属性（発症年齢など）、臨床的背景、性・生殖に関連する困難、性・生殖に関連する医療者からの情報提供の有無（配偶子保存など）、性・生殖に関連して欲しかった情報と提供者・媒体などを含む。発症年齢や性別による困難体験や情報支援ニーズの共通点と相違点に着目しながら適宜統計的分析を行う。

5. 男性がん患者のアピアランス変化が社会活動に及ぼす影響と情報ニーズに関する研究：（2年次新規）

国立がん研究センター中央病院を受診する再来男性を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施する。外来ロビーで調査員が配布、待ち時間に記入してロビーの回収箱で回収する。3日間の調査で1000名への配布を目指す。質問項目として、外見変化の状況、外見変化で引き起こされた心理社会的苦痛の程度、外見に関する価値観、外見変化への対応に関する情報ニーズ、外見に問題のある人の心理的well-being尺度、個人属性、外見変化への対応状況と相談相手などを含む。

記述統計を算出するとともに、外見変化と社会的困難や、外見変化による対象者の心理的well-beingの関連要因を明らかにする目的の統計的解析を行う。

6. 初回治療後のがんサバイバーへの情報提供実態と患者満足度に関する研究：

調査会社のモニターでがん体験を持つ者690名を対象として、がんに関連する20種の医療情報について、担当医からの説明の有無と方法（口頭のみ、説明文書のみ、口頭と説明の両方）、説明方法による満足度、説明がなかった際の困難の有無について質問するインターネット調査を実施した。記述統計を算出するとともに、説明方法と満足度の関連について統計的解析を行う。

研究成果と考察

全期間（研究終了時）

- ・ がんサバイバーシップに関連してわが国で先行研究がきわめて少ない6テーマの研究を実施した。
- ・ 肥満乳がん患者対象の「運動・栄養・コーチングによる活性化プログラム」は、パイロット介入研究で実施可能性と効果を認めた。がみとめられたため、スポーツ科学領域の研究グループとRCTや地域における活動展開を検討する共同研究を計画中である。
- ・ 「婦人科がん患者の健康行動」については、全4施設でデータ収集を終了し、385の有効回答につき、健康行動の促進・阻害要因を分析中である。
- ・ 「男性がん患者のアピアランス変化」「初回治療後のがんサバイバーへの情報提供実態と患者満足度」「小児・AYA世代のがん患者が体験する性・生殖関連の困難と情報ニーズ」の3テーマについては、当初予定したデータ収集を終了し、対象患者・家族が直面する困難の実態や、情報支援ニーズを明らかにするとともに、すでに英文論文を2本投稿した。情報ニーズにもとづく媒体・内容で男性患者のアピアランス支援、初回がんサバイバー向けの治療・療養情報、小児・AYA世代の性と生殖に関連した支援ツールを検討していく予定である。特に、小児・AYA世代の性と生殖に関連した支援ツールについては、H28年度からのがん研究開発費プロジェクトでの開発が予定されている。
- ・ 「がんになった親子のコミュニケーションと生活支援」については、IRB承認を経て、首都圏2施設において乳がん患者とその夫のペア調査を開始した。現在調査継続中であり、調査結果をもとに、特に父親（＝夫）の家事育児負担を軽減する支援冊子を作成する予定である。
- ・ 「がん患者と家族の就労支援における医療施設内外の専門家連携に関する研究」については、院内相談員向け「社会保険労務士等との連携のヒント」を作成した。本冊子は国立がん研究センターがん情報サービスでネット公開するとともに、全国の都道府県拠点病院と都道府県がん対策担当課に配布した。

倫理面への配慮

本プロジェクトの研究においては、ヘルシンキ宣言及び「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(平成26年12月22日改正)」「平成26年度までに開始された研究に関しては「臨床研究に関する倫理指針(平成20年7月31日改正)」、「疫学研究に関する倫理指針(平成20年12月1日改正)」)に従って実施し、国立がん研究センター研究倫理委員会等、関連倫理委員会の承認を得るものとする。

本研究に関連する、本研究期間中の主な発表論文等

第1年次

(雑誌論文)

- ・がん研究開発費による成果としての記載はないが、関連するもの
- 1) Yuko Takeda, Kunimasa Morio, Linda Snell, Junji Otaki, Miyako Takahashi and Ichiro Kai :
Characteristic profiles among students and junior doctors with specific career preferences BMC Medical Education 2013, 13:125 doi:10.1186/1472-6920-13-125
- 2) 高橋 都：がん治療を受ける患者の性をどう支えるか がん看護 19:271-273, 2014
- 3) 高橋 都：女性がん患者の性機能障害とその支援 がん看護 19:277-280, 2014
- 4) 高橋 都：がんサバイバーシップとは何か — 充実した社会生活を実現するための研究と支援について. 予防医学 55:117-121, 2013
- 5) 高橋 都：がん患者の就労支援— わが国の現状と今後の課題 政策・就労 公衆衛生 45:987-991, 2013
- 6) 丸 光恵、富岡晶子、中尾秀子、小川純子、村上育穂、前田留美、竹内幸江、高橋百合子、野中淳子、吉川久美子、勝本祥子、飯島佳織、内田雅代、高橋 都：小児がん長期フォローアップに関する看護の現状と看護に困難を感じた事例の実際— 外来・病棟看護管理者を対象として— 日本小児血液・がん学会誌 50: 203-211, 2013
- 7) 高橋 都：サバイバーシップ研究とは何か— 「その後」を支える医療に向けて 日本医事新報 4654号 p30-33, 2013
- 8) 勝俣範之：がんの終末期を支えるには 子宮がん 内科 112: 1114-1119, 2013
- 9) 勝俣範之：抗癌薬各論 卵巣癌の薬物療法 外科 75:1399-1402, 2013
- 10) 勝俣範之：血液・腫瘍 がん診療のクリニカル・パール Medicina 50:1560-1563, 2013
- 11) 山内英子：遺伝性乳がん・卵巣がん症候群(HBOC)とその予防 公衆衛生 77:1006-1010, 2013
- 12) 桑原節子：病態と緩和ケアにおけるサポート 終末期患者に管理栄養士ができること Nutrition Care 6: 986-987, 2013

(学会発表)

- 1) Miyako Takahashi, Akira Oshima, Norikazu Masuda et al: Sexual function among young breast cancer survivors in Japan correlates with sexual communication with partners. 2013 International Congress of Psycho-Oncology (Poster presentation) 2013.11.8 Rotterdam,
- 2) 高橋 都：働くがん患者への多角的支援とは<概略> 第11回日本臨床腫瘍学会シンポジウム 2013, 8.30 (仙台)
- 3) 高橋 都：がん経験者とその家族の自主的活動への支援—医療者はどう貢献できるか? 第51回日本癌治療学会パネルディスカッション 2013.10.24 (京都)
- 4) 高橋 都：がんと就労概説—社会における多角的支援 日本サイコオンコロジー学会シンポジウム 2013.9.30 (大阪)
- 5) 高橋 都：がん治療と就労の両立～本人と職場の納得度を高めるために. 第23回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会シンポジウム 2013.9.27 (名古屋)
- 6) 高橋 都：女性ががんになったとき—セクシュアリティを見る「女目線」と「男目線」第24回性機能学会東部会講演 2014.2.22 (東京)
- 7) 山内英子：遺伝性乳がん・卵巣がん症候群—その女性らしい選択のために— 第14回乳癌最新情報カンファレンス 2013.7.12-13 (鳥羽)
- 8) 山内英子：乳がん治療の「リアル」—その女性(ひと)らしい選択をサポートして— 第17回日本統合医療学会公開講座 2013.12.21-22 (東京)
- 9) Hideko Yamauchi, Kumiko Hashimoto, Rima Hiramatsu et al: Cancer Survivorship: Facts and Support

System for Working Survivors. The 29th International Congress of Medical Women's International Association 2013. 7. 31-8. 3 Seoul

- 10) Hideko Yamauchi, Kumiko Hashimoto, Takako Iwata et al : Establishing Japanese model "Working Ring"-informational, emotional and problem-solving group intervention for working breast cancer survivors. The 36th San Antonio Breast Cancer Symposium 2013. 12. 10-14 San Antonio
- 11) Mariko Kobayashi, Kaori Osawa, Miwa Ozawa: Support Group for Children Whose Parent Has Cancer - Implementation and Evaluation of the CLIMB® Program in Japan—2013 International Congress of Psycho-Oncology (Poster presentation) 2013. 11. 6 Rotterdam
- 12) 小林真理子、神前裕子、久野美智子：がんの親をもつ子どもへの学校での支援—学校での支援に関する冊子の有用性の検討—日本心理臨床学会第32回秋季大会（ポスター発表）2013. 8. 28、横浜

(書籍)

- 1) 高橋 都：「治療」と「就労」の両立に向けて. 国立がん研究センターがん対策情報センター編 わたしも、がんでした—がんと共に生きるための処方箋, pp134-139 日経BP社, 2013
- 2) 山内英子, 吉野美紀子：乳がんって遺伝するの？ 遺伝性乳がん卵巣がんのすべて 主婦の友社, 2013

第2年次

(雑誌論文)

- 1) Miyashita M, Ohno S, Kataoka A, Tokunaga E, Masuda N, Shien T, Kawabata K, Takahashi M: Unmet information needs and quality of life in young breast cancer survivors in Japan. Cancer Nursing. (in press)
- 2) Okada H, Okada H, Maru M, Maeda R, Iwasaki F, Nagasawa M, Takahashi M: Impact of childhood cancer on maternal employment in Japan. Cancer Nursing DOI: 10.1097/NCC.000000000000123
- 3) Takahashi M: Psychosocial distress among young breast cancer survivors: implications for healthcare providers. Breast Cancer DOI 10.1007/s12282-013-0508-9
- 4) Saito N, Takahashi M, Sairenchi T, Muto T : The impact of breast cancer on employment among Japanese women. Journal of Occupational Health 56:49-55, 2014
- 5) 富田真紀子, 高橋 都, 多賀谷信美, 角田美也子, 青木美紀子, 甲斐一郎, 武藤孝司：乳がん患者の夫の心身不調と相談行動. 緩和ケア 24:394-400, 2014
- 6) 高橋 都：がん治療と就労の両立のために—施策と支援の方向性. 労働科学 69:324-327, 2014
- 7) 高橋 都：がん治療を受ける患者の性をどう支えるか がん看護 19:271-273, 2014
- 8) 高橋 都：女性がん患者の性機能障害とその支援 がん看護 19:277-280, 2014
- 9) 高橋 都：がんとわかった「その後」を生きる 医療の広場 54(10):7-10, 2014
- 10) 高橋 都：がんサバイバーシップ—歴史的背景, 研究トピック, 医療者による支援のかたち 乳癌の臨床 29 (5) : 451-458, 2014
- 11) 山内英子 【乳癌診療の新しい展開I】 遺伝性乳癌・卵巣癌症候群(HBOC)とその予防. Pharma Medica 32(4):35-38, 2014
- 12) 小林真理子：がんになった親の体験や心理—学齢期の子どもを持つ母親の語りから—, 緩和ケア別冊, 青海社, 第24巻, 11-15, 2014年6月
- 13) 小林真理子, 神前裕子, 久野美智子：がんになった親と子どもへの学校における支援, 緩和ケア別冊 24:59-63, 2014
- 14) 小林真理子, 中島涼子：知っていますか？子どものこと—子どもの発達段階と死の概念の理解—, 緩和ケア別冊 24:155-159, 2014
- 15) Yoshida S, Shimizu K, Kobayashi M, Inoguchi H, Oshima Y, Dotani C, Nakahara R, Takahashi T, Kato M. :Barriers of Healthcare Providers Against End-of-life Discussions with Pediatric Cancer Patients. Jpn J Clin Oncol. 2014 Aug;44(8):729-735
- 16) 小林真理子：子育て中のがん患者の心, ナーシング・トゥデイ, 29(6):12-15, 2014
- 17) 小林真理子：子どもの学校の教師との連携, ナーシング・トゥデイ, 29(6):47-50, 2014
- 18) 小林真理子：CLIMB®プログラム日本版の紹介と展開, ナーシング・トゥデイ, 29(6):51-57, 2014
- 19) 加藤友康 【産婦人科手術Up to Date】 (第2章)婦人科 子宮頸癌 広汎子宮全摘出術 解剖学的視点から.

- 産科と婦人科 81(Suppl.):128-132, 2014
- 20) 勝俣範之 がん化学療法における支持療法のエビデンスと実践. 尿路悪性腫瘍研究会記録 40(67-83, 2014
 - 21) 勝俣範之 【がん診療One More Step-現場の薬剤師にラショナルレーを】 抗がん剤治療Go or Stop? 薬事 56(6):903-909, 2014
 - 22) 菅野哲平, 勝俣範之 【がん薬物療法の支持療法・副作用対策・リスク/コストベネフィット】 G-CSF. 腫瘍内科 14(2):111-115, 2014
 - 23) Taniyama TK, Hashimoto K, Katsumata N, Hirakawa A, Yonemori K, Yunokawa M, Shimizu C, Tamura K, Ando M, Fujiwara Y. Can oncologists predict survival for patients with progressive disease after standard chemotherapies? Curr Oncol;21(2):84-90, 2014.
 - 24) Sato K, Watanabe T, Katsumata N, Sato T, Ohashi Y. Satisfying the needs of Japanese cancer patients: a comparative study of detailed and standard informed consent documents. Clin Trials;11(1):86-95, 2014.
 - 25) Harano K, Terauchi F, Katsumata N, Takahashi F, Yasuda M, Takakura S, Takano M, Yamamoto Y, Sugiyama T. Quality-of-life outcomes from a randomized phase III trial of dose-dense weekly paclitaxel and carboplatin compared with conventional paclitaxel and carboplatin as a first-line treatment for stage II-IV ovarian cancer: Japanese Gynecologic Oncology Group Trial (JGOG3016). Ann Oncol;25(1):251-7, 2014.
 - 26) 野澤桂子 【アピアランス支援 患者の自分らしさを支える!外見の変化や悩みの対処】 がん患者の「外見の悩み」の支援 アピアランス支援センターの取り組み. Oncology Nurse 8(1):3-7, 2014
 - 27) 野澤桂子 がん患者のアピアランス支援 外見と心に寄り添うケア 医療の場で求められるアピアランス支援. がん看護 19(5):489-493, 2014

(学会発表)

- 1) 高橋 都:「がん治療と就労の調和～医療者が動けば!」 シンポジウム12術後補助化学療法と就労の両立支援をめざして 第62回日本職業・災害医学会学術大会 2014. 11. 16 神戸国際会議場 神戸市
- 2) Seiichiro Tateishi, Takayuki Ogasawara, Ko Hiraoka, Yoshiyuki Shibata, Yoko Matsumoto, Akiko Oka, Arisa Harada, Miyako Takahashi, Koji Mori: Understanding employer support for cancer survivors in workplaces. Asian Congress of Occupational Health 2014 Fukuoka
- 3) 高橋 都:「がん治療後の性—治療スタッフによる情報提供と支援を考える」 日本性機能学会第 25 回学術集会シンポジウム5 がんサバイバーシップと Sexuality 2014. 9. 6 仙台市
- 4) 高橋 都:「社会的苦痛～就労」日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会 教育講演 4「本当にわかっていますか?～緩和ケアの全人的苦痛」. 2014. 8. 31 さいたま市
- 5) 高橋 都:「がん治療と就労の両立—日本の現状と課題」チーム医療推進プログラム 4「肺がん治療と就労の両立」第 55 回日本肺癌学会学術集会 2014. 11. 16 国立京都国際会館 京都市
- 6) 高橋 都:「がん就労者の支援—医療現場・職域・地域の連携に向けて」. シンポジウム 19「がん患者の就労支援—医療現場・地域・職域・行政における連携の実際」第 73 回日本公衆衛生学会総会 2014. 11. 6 栃木県総合文化センター 宇都宮市
- 7) 高橋 都:「合併症スクリーニングにおける小児科と家庭医連携の課題」会長シンポジウム「小児がん経験者の長期フォローアップ」 第 12 回日本臨床腫瘍学会学術集会 2014. 7. 18 福岡市国際会議場 福岡市
- 8) 高橋 都:教育講演「がん治療後の性生活を考える—あなたが今日からできること」第 19 回日本緩和医療学会学術大会 2014. 6. 20 神戸市国際展示場 神戸市
- 9) 高橋 都:シンポジウム「仕事とがん治療の両立—納得度の高い働き方をどう実現するか」第 19 回日本緩和医療学会学術大会 2014. 6. 20 神戸市国際展示場 神戸市
- 10) 高橋 都 若年性乳がん患者とパートナーの性生活 早期からの支援提供を. 第 22 回日本乳癌学会総会シンポジウム, 2014. 7. 11 大阪国際会議場 大阪市
- 11) 富田眞紀子, 高橋 都, 多賀谷信美, 角田美也子, 武藤孝司 乳がんカップル調査<第 4 報> 診断後の夫婦関係と性生活の変化 患者と夫双方の視点から. 第 22 回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 10 大阪国際会議場 大阪市
- 12) 富田眞紀子, 高橋 都, 多賀谷信美, 角田美也子, 武藤孝司 乳がん患者の心的外傷後成長(PTG)の関連要因に関する研究. 第 27 回日本サイコオンコロジー学会総会 シンポジウム, 2014. 10. 3 タワーホール船堀 東京都

- 13) 富田眞紀子, 高橋 都, 多賀谷信美, 角田美也子, 武藤孝司 乳がん患者における就労状況の変化と職務満足度. 第52回日本癌治療学会学術集会, 2014. 8. 29 パシフィコ横浜 横浜市
- 14) 高橋 都: シンポジウム「がん治療現場の医師・看護師による就労支援—実践のノウハウを学ぶ」第52回日本癌治療学会学術総会 2014. 8. 29 パシフィコ横浜 横浜市
- 15) 青儀健二郎, 山下夏美, 谷水正人, 宮内一恵, 菊内由貴, 清水弥生, 松本陽子, 高橋 都: 「治療と就労の両立に関するアンケート調査」による地方がん患者就労支援のための基礎データ収集」第52回日本癌治療学会学術総会 2014. 8. 29 パシフィコ横浜 横浜市
- 16) 古屋佑子, 高橋 都, 立石清一郎, 平岡晃, 富田眞紀子, 森晃爾: がん就労者の支援に向けた職場と医療機関の連携(第1報) 好影響事例および悪影響事例の検討. 第87回日本産業衛生学会, 2014. 5. 24 岡山コンベンションセンター 岡山市
- 17) 扇田真美, 関口建次, 赤羽佳子, 河守次郎, 羽賀千織, 伊藤亮子, 山内英子: 乳房温存手術後の放射線皮膚障害における保湿薬の有用性 ランダム化比較試験. 第22回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 12 大阪国際会議場 大阪市
- 18) 大川恵, 玉橋容子, 吉野美紀子, 金井久子, 矢形寛, 山内英子: 未発症BRCA1/2遺伝子変異保因者の診療に対するニーズ. 第22回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 11 大阪国際会議場 大阪市
- 19) 飯岡由紀子, 岩田多加子, 作野優子, 矢形寛, 中村清吾, 山内英子: ホルモン治療中の乳がん女性のQOLに関連する要因の探索. 第22回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 10 大阪国際会議場 大阪市
- 20) 北川瞳, 林直輝, 川野純子, 北野敦子, 吉田敦, 矢形寛, 中村清吾, 角田博子, 山内英子: 妊娠期乳癌における集学的治療と遺伝カウンセリングの実際. 第22回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 11 大阪国際会議場 大阪市
- 21) 中山可南子, 保坂隆, 橋本久美子, 牧洋子, 山内英子 乳がん患者就労問題の解決ツールとして施行した, 医療従事者に向けた講習会の効果. 第11回日本外科学会定期学術集会, 2014. 4. 3 国立京都国際会館 京都府
- 22) 小林真理子: がん医療における子どもへの支援—多職種によるサポートグループの実際—子どもの心の医療における多職種連携, 第14回日本外来精神医療学会, 2014. 7. 12 栃木市総合文化センター 栃木市
- 23) 小林真理子: がん患者の子どもへのサポート—親のがんを子どもにどう伝え, どう支えるか— (ワークショップ) 日本遊戯療法学会第20回大会, 2014. 7. 26 星陵会館 東京都
- 24) 神前裕子, 小林真理子: がんの親をもつ子どもへの学校での支援—小学校・中学校における教師の支援の現状—, 日本心理臨床学会第33回大会, 2014. 8. 25 パシフィコ横浜 横浜市
- 25) 小林真理子: CLIMB®プログラムの実践—がんになった親と子どもをグループで支える— (学術セミナー) 第52回日本癌治療学会, 2014. 8. 29 パシフィコ横浜 横浜市
- 26) M Kobayashi, K Osawa, M Ozawa, E Matsushima: Support Group for Children Whose Parent Has Cancer (2nd Report) — QOL of children who attended CLIMB® Program and their parents— 16th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy, 2014. 10. 22 Lisbon,
- 27) S Yoshida, K Shimizu, M Kobayashi, H Inoguchi, Y Oshima, C Dotani, R Nakahara, T Takahashi and M Kato: Barriers of Healthcare Providers Against End-of-life Discussions with Pediatric Cancer Patients, 16th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy, 2014. 10. 24 Lisbon
- 28) 田村宜子, 清水千佳子, 加藤友康, 坂東裕子, 浅田義弘, 藤原康弘: 若年乳がん患者におけるAMHと月経再開についての検討. 第22回日本乳癌学会総会, 2014. 7. 11 大阪国際会議場 大阪市
- 29) 伊藤千晶, 矢内貴子, 清水千佳子, 山崎直也, 茅野修史, 牧野好倫, 岩瀬治雄, 野澤桂子, 林憲一 医薬品添付文書と患者向けパンフレットにおける外見関連副作用の情報提供の実態調査. 第52回日本癌治療学会学術総会, 2014. 8. 30 パシフィコ横浜 横浜市
- 30) 野澤桂子, 高橋恵理子, 鈴木公啓, 矢澤美香子 がん治療に関するインターネット情報への信頼と危険性. 第52回日本癌治療学会学術総会, 2014. 8. 28 パシフィコ横浜 横浜市
- 31) 野澤桂子, 今野裕之 外見関連の情報提供を中心としたサポートプログラムの有用性に関する予備的検討. 日本心理学会第78回大会, 2014. 9. 10 同志社大学 京都府
- 32) Setsuko Kuwahara, Noriko Aoki, Masahiro Sunaga, Misako Kawai: Dietary Adjustment for Cancer Patients Using Dashi and Umami Efficacy. The 6th Asian Congress of Dietetics, 2014. 8 Taipei
- 33) Setsuko Kuwahara, Misako Kawai, Masahiro Sunaga, Hiroki Matubara: A Survey of the nutritional management on oro-nasal dysfunctions on cancer patients in Japan. The 6th Asian Congress of Dietetics, 2014. 8. 23 Taipei

(書籍)

- 1) 小林真理子：心理療法5 遊戯療法, 心理臨床の基礎, 放送大学教育振興会, 2014. 3
- 2) 小林真理子：コミュニティ援助 1—基本姿勢と援助の方法—, 心理臨床の基礎, 放送大学教育振興会, 2014. 3
- 3) 小林真理子：コミュニティ援助 2—子育て支援—, 心理臨床の基礎, 放送大学教育振興会, 2014. 3
- 4) 高橋 都：性機能障害 山内英子・松岡順治編 「がんサバイバーシップ」 p87-93医学書院, 2014

(政策提言 (寄与した指針等))

厚生労働省「がん患者・経験者の就労支援のあり方に関する検討会」報告書

第3年次

(雑誌論文)

- 1) Endo M, Haruyama Y, Takahashi M, Nishimura C, Kojimahara N, Ymaguchi N: Returning to work after sick leave due to cancer: A 365-day cohort study of Japanese cancer survivors. *Journal of Cancer Survivorship*. doi: 10.1007/s11764-015-0478-3
- 2) Miyashita M, Ohno S, Kataoka A, Tokunaga E, Masuda N, Shien T, Kawabata K, Takahashi M: Unmet information needs and quality of life in young breast cancer survivors in Japan. *Cancer Nursing*. doi: 10.1097/NCC.0000000000000201
- 3) Okada H, Okada H, Maru M, Maeda R, Iwasaki F, Nagasawa M, Takahashi M: Impact of childhood cancer on maternal employment in Japan. *Cancer Nursing* 38:23-30, 2015
- 4) 平岡 晃、高橋都：がん「働くこと」～医療現場と職場のそれぞれの立場から就労支援を考える 保健の科学 (印刷中)
- 5) 高橋 都：がん治療と就労の調和—主治医に期待されるアクション. *日本職業・災害医療学会誌* 63(6): 351-356, 2015
- 6) 酒井瞳、高橋都：がんサバイバーシップとは何か 治療 97(10):1342-1345, 2015
- 7) 土屋雅子、高橋都：がんサバイバーシップ：慢性疼痛と社会生活 ペインクリニック 36: S713-S719, 2015
- 8) 土屋雅子、高橋都：がんサバイバーシップ研究の目的と実際. *血液内科* 71:169-174, 2015
- 9) 高橋 都. がん就労者への支援はどうあるべきか. *労政時報* 第3886号 107-117, 2015
- 10) 高橋 都：働くがん患者の現状と課題 (患者支援の視点から) *産業医学ジャーナル* 38(1):13-17, 2015
- 11) 藤間勝子, 野澤桂子 がん患者のアピアランス支援—外見と心に寄り添うケア—ウィッグ以外の脱毛カバーと脱毛時の頭皮・頭髮ケア— *がん看護* 20(3): 369-372, 2015.
- 12) 桑原節子, 河合美佐子, 鈴木知子, 他;がん患者の味覚障害への対応と工夫 *臨床栄養* Vol.127 No1. 55-58, 2015
- 13) 桑原節子;がん患者へのダイエットカウンセリング, *日本静脈経腸栄養学会誌* Vol.30 No4.933-936, 2015
- 14) Yonemoto T, Takahashi M, Maru M, et al: Marriage and fertility in long-term survivors of childhood, adolescent and young adult (AYA) high-grade sarcoma. *International Journal of Clinical Oncology* DOI 10.1007/s10147-016-0948-2

(学会発表)

- 1) Hitomi Kitagawa, Takashi Hosaka, Nana Takeda, Noriko Matsumoto, Makiko Tomita, Miyako Takahashi, Hideko Yamauchi: Effect of a structured group intervention on obesity in breast cancer survivors. 2015 San Antonio Breast Cancer Conference, 2015 Dec.
- 2) 中山 可南子, 橋本 久美子, 保坂 隆, 和田 耕治, 高橋 都, 山内 英子: 医療者の就労支援に関する意識調査 第23回日本乳癌学会総会 2015. 7. 4
- 3) 竹田 菜々, 北川 瞳, 富田 眞紀子, 高橋 都, 山内 英子: 術後内分泌療法中の乳がん患者に対する活性化プログラム 運動療法・栄養療法・グループコーチングの併用 第23回日本乳癌学会総会 2015. 7. 4
- 4) 中島涼子, 小林真理子: がん治療をした配偶者をもつ父親の子育て経験と対処, 第28回日本サイコロジ学会、広島市、2015. 9. 18
- 5) 小林真理子, 塩田このみ, 神 前裕子: がんの親をもつ子どもへの連携による支援—学校向け冊子アンケート

ートからの検討—日本心理臨床学会第34回大会、神戸市、2015.9.20

- 6) 野澤桂子・茅野修史・藤木政英・矢澤美香子・鈴木公啓：がん切除による外見変化に伴う治療を補完する方法～全国の大学病院形成外科を対象として～第58回日本形成外科学会総会・学術集会 2015年4月8日～10日 ウェスティン都ホテル京都
- 7) 高橋恵理子・矢澤美香子・鈴木公啓・野澤桂子：がん治療による外見変化と、心理的および医学的介入が患者の心理社会的機能に及ぼす影響に関するシステマティックレビュー 第13回日本臨床腫瘍学会 2015年7月16日～18日 札幌市教育文化会館
- 8) 野澤桂子：アピアランスケアについて 第69回 国立病院総合医学会シンポジウム 2015年10月2日 札幌教育文化会館
- 9) 高橋 都：第12回日本乳癌学会関東地方会メディカルスタッフセミナー基調講演「がんサバイバーシップとスピリチュアルケア」 働くがん患者への支援—医療機関では何をどこまですればよいのか？ 大宮ソニックシティ 2015.12.5
- 10) 高橋 都：第13回日本乳癌学会近畿地方会看護セミナー基調講演 働くがん患者の支援—病院でできるアクションを考えよう！ 大阪国際会議場 2015.11.29
- 11) 高橋 都：医療者による就労支援—患者へのアクションと職場との連携のポイント 第53回日本癌治療学会 就労シンポジウム 京都国際会議場 2015.10.30
- 12) 富田眞紀子、高橋 都、野澤桂子、藤間勝子、荒井保明：男性がん患者の外見変化に伴う苦痛と情報・支援ニーズ 第53回日本癌治療学会 就労シンポジウム 京都国際会議場 2015.10.30
- 13) 平岡晃、古屋佑子、酒井瞳、富田眞紀子、高橋 都：「働くがん患者のための症状別ヒント集」作成に向けた患者アンケート調査 第25回産業医・産業看護全国協議会 周南市文化会館 2015.9.16-19
- 14) 高橋 都：がんサバイバーシップ研究とケア—我が国の現状と課題 第13回日本臨床腫瘍学会学術集会 シンポジウム 札幌 2015.7.17
- 15) 青儀 健二郎(国立病院機構四国がんセンター 臨床研究センター)、山下 夏美、谷水 正人、松本 陽子、高橋 都：がんサバイバーシップを支えるための患者就労支援体制構築と課題 第23回日本乳癌学会総会 2015.7.4

(書籍)

- 1) 小林真理子編著 『心理臨床と身体の病』 (放送大学教材)、放送大学教育振興会、(印刷中)
- 2) 高橋 都：がん患者の就労支援：医療現場・地域・職域・行政の連携の実際。武藤孝司、磯博康、村嶋幸代編「公衆衛生領域における連携と協同」pp171-178, 日本公衆衛生学会協会, 2015
- 3) 高橋 都：がん治療現場の医師・看護師による「就労支援」—実践のノウハウを学ぶ。日本癌治療学会編「がん患者の治療と就労の両立支援：医療側と事業側の連携に必要なものは何か」pp44-48, 2015
- 4) 高橋 都：がんサバイバーシップ 佐藤隆美、藤原康弘、古瀬純司、大山優編「What's New in Oncology3版」pp220-224, 南山堂, 2015
- 5) 高橋 都：性機能障害とその対策 日本臨床腫瘍学会編「新臨床腫瘍学改定第4版」pp643-645 南江堂, 2015

(政策提言 (寄与した指針等))

厚生労働省事業所における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン